

## 「見え方のちがいをこえて 授業改善要望書づくりへ」

公立高校・渡部翔子

### 1. はじめに

2021年、夜間定時制高校に異動した。生徒は、4学年各1学級で、全校生徒数が40名程度である。異動してすぐに担任した新入生の学年は男子10名女子2名。その内外国ルーツの生徒が2名、それ以外は全員が3~6年の不登校経験者だった。それぞれに、発達の課題や家庭に事情を抱え、これまで何らかの形で他者との関係に傷つき、ずっと自分を固く閉ざしてきた彼らに、学校を楽しい場所にしたいという思いがあった。生徒会担当にもなれたので、**コロナ禍で失われていた行事の復活に力を入れた**。1年次の終わりまでに、諸処の事情で半数が去り、その中で唯一の女子となったリンカがギリギリ奇跡の進級を繰り返して3年まで進級した。彼女は、家庭に複雑な問題を複数抱え、学習にも愛着にも課題を持ち、私がもっとも手を掛けた生徒だった。3年の末、エネルギーでHRを明るくしてくれていたリンカが去り、男子6人と私は重いリンカ・ロスのまま4年次を迎えた。

自分とは異なる他者とどう出会わせるか、その違いを越えてつながり、協働して何かを形にすることの喜びをどう味わってもらうかを常に頭の隅に置いて、HR運営も、授業も、行事づくりも行ってきた。それでも、長い間家に引きこもってきた彼らは、自他に関心を持ちにくく、全てのことに苦手意識が強く、自己肯定感も低く、支援員の助けを借りることに、自分のノートを覗き込まれることにも抵抗を示したり、アウトプットが極端に苦手だったり、なかなか人とつながれない傾向を持っていた。それが顕著に表れるのが芸術鑑賞の時で、演者が曲に合わせてリズムを取ることを呼びかけても、音楽に合わせて動く体を持ち合わせておらず、ぎこちなく座る固い背中が印象的だった。軽音楽同好会を立ち上げた上級生数名だけが身体を揺らして、演奏が終わった時も、彼らが拍手するのを見てから他律的にしている感じだった。

HRでは、**経済的にも厳しく、朝からアルバイトをし**

てくる彼らに「**圧を掛けない(生徒をコントロールしようとしな)**」と心に決めてきた。4年になって遅刻欠席がなくならないのも、職員室への入り方が身につかないのも、自分の精神を安定させるためには外からの刺激を遮断する必要があるショウタがいつもフードを被ったままのもの、周りから「ゆるい、締まってない」と見られていることは感じていたが、力で言うことをきかそうとしたことはほとんどなかった。**修学旅行を約ひと月後に控え、全員が就職希望なのにこのままで大丈夫なのか?と若干焦りも出てきた。**

ある日のSHRで、声を掛けてもイヤホンが耳に入ったままで、スマホをしまおうとしないショウタに「ショウタ、イヤホン。スマホもしまつて」と机の前まで行って、声を掛けたら、いきなり無言でザーッと机の上にあったものをすべて腕でなぎ払って床に落とした。少し、傷ついたが、その時は深追いせず、「ショウタ、何すんの?スマホが壊れるよ」とだけ言った。放課後の個人面談で、「ああいう振る舞いを見ると就職大丈夫かな?と心配になるよ」と言うと、「俺、バイト先では切り替えて、接客ナンバーワンなんで大丈夫です」と言う。「それなら、教室でもやってよ」と言うと「なぜか、家と教室だけは素になっちゃってムリなんだ」と答えた。

### 2 生徒たちとつくり更新してきた行事

4月の対面式(新入生は花アーチをくぐって入場)、新入生歓迎集会(年間行事と部活動の紹介スライドの上映、2025年度は全校アイスブレイクを実施)

5月の生徒総会では、事前に議案書審議のLHRを設け、学校に対する質問・要望を抽出し、当日学年代表がマイクで意見を述べ、応答は生徒会役員からではなく、関係分掌の教職員がするようにした。

#### ① 軽音楽同好会を作ってほしい → 最初の年に、

私が顧問をし、部・同好会の新設に関する規定がなかったので、ルールづくりから行い、立ち上

げた。

② コロナでなくなった遠足を復活させてほしい

→ 教務の遠足担当がその場で「前向きに検討します」と答え、その日の内に近くの動物公園に独断で決定。

③ (②の翌年) 遠足の行き先を勝手に教務の先生が決めてしまうのではなく、生徒の意見を聞いて決めてほしい → 生徒の声を反映し、TDLへ。

④ 学年の枠を越えたレクをやってほしい →

2年連続で出され 2024 年 11 月に総探とLHRの2コマを使ってミニ運動会的な内容で実施。生徒会役員も学年の一員として参加するため、運営の人手不足だったため、競技には参加できない生徒たちが補助役員として運営。校長、給食や事務スタッフも参加し、まさに全校レクとなる。(遠足が予算不足のため隔年実施なので、現在は交互に実施していくことを検討中。)

⑤ 給食時、食堂への飲み物の持ち込みを許可してほしい(2025 年度実験的に実施)

9月の文化祭(コロナ禍前までは全日と一緒に一角を借り、クッキー販売やお化け屋敷を一般公開していたそうだが、コロナ禍以降は別開催となり、定時は水・木準備で金が本番、会場は視聴覚室のみで非公開/全日は土日一般公開なので、定時はどんなに手を掛けて飾り付けても本番終了後その日の内に撤収なのが寂しい)各学年企画、生徒会企画、有志参加の出し物(歌、マジック等)と後夜祭と称して花火大会を実施。花火を家庭で経験したことのない生徒も多く、喜ぶ姿が印象的。

私の学年(HR)は、1年次に有志5名がダンスを踊り、私も夏休み中に一緒に練習し、ステージに立った。2年次には、オタ芸で振り付けが複雑で挫折したユウトと私を除き、全員がステージに立って踊った。かっこ悪いことを嫌い完全主義のリンカは、振り付けが覚え切れていなかったのも、きっと当日踊らないだろうと思ったが、急遽仮面をつけて、分からないながら踊りきって驚かされた。後で知ったが、夏休み中、全日との兼ね合いで学校が使える数日では足りず、自分たちで新幹線の高架下なら多少うるさくしても苦情が来ないだろうと、うってつけの場所を探し出し、みんなで調整して練習日を決めたそう。だが、そこにいつも来るのは、ライム、デイビッド、ヒカリだけで、他のメンバーはほとんど表れず、危機感を募らせたライムが夏

休みの最後にLINEのグループ通話で1時間ほど学級会を開いたそう。そこで「オレ1人で待ってても誰も来ないってことも何回かあったよ。どうして来ないの?こんな状態で文化祭踊れるの?おまえらやる気ないんだったらオレバカみただからもう止めるわ。明日、最後のチャンスでいつもの所で待ってるけど、そこに全員揃わないならもうオレは知らないからな!」とそれまで抑えていた感情を爆発させたそう。そこからは、スイッチが入って、全員練習ができ、本番よりクオリティーが高かったと聴いた。家から遠いヒカリは、毎回母親が車で送り、覚えるのが苦手なヒカリが後れを取らないようにと考えてか?母親も一緒に練習に加わっていたとリンカから聴いて知った(ライムはこの時のことを3年次の生活体験作文に書いている補助資料0)。その時は、全日的感覚の残っていた私は、本当のすごさに気づけていなかったが、他者とつながれなかった子たちが、複雑な振り付けを覚えて、規模は小さくても、とにかく全校生徒の前でリズムに乗って踊れたということは、今から思うとすごいことだったんだとしみじみ思う。1年次のダンスで懲りて裏方(音響係)に回っていたユウトが、みんなの演技に異常に興奮していたのを思い出す。



1年夏休みダンスの練習



2年 文化祭 オタ芸発表↑ & その後



12月のお楽しみ会（ムスリムも在籍しているので「クリスマス会」の名称を変更）異文化を知る機会となるような、クイズやゲーム等を実施。

1月末の予餞会では、4年間で振り返る思い出スライドの上映、手作りの装飾、全員参加型のゲーム等で4年生の卒業を祝う（卒業生は花アーチをくぐって退場）。2024年度では、送り出す生徒会長が、前生徒会長に記念品を渡しながらかひと贈る際、感極まって泣きじゃくり抱き合う場面があり、異動してきた4年前には、ほとんど生徒間の繋がりが感じられなかったことを思うと、行事の力を信じて動き続けてきたよかったと感じた。

**最初は**、教頭から「この学校の誰が行事をやっているか？」と問われ、同僚から「行事をやると不登校になる」と**ネガティブな声が上がっていたが**、回を重ねるうちに、徐々に肯定的に捉えられるようになり、自分の担任する学年が最高学年になった**2024年度には、どの行事にも校長や事務職員、給食スタッフまで参加してくれるようになり、教室に入れなかった数名の1年生が行事をきっかけに入れるようになった。**教員アンケートにも、以前は**行事に否定的だった人から「準備が大変だろうが、自分も協力するので、ぜひ恒例行事にしてほしい」という声**が寄せられるようになった（生徒会長として、一緒に行事作りをしてきたライムは、就職した先でのイベント企画にこの4年間の経験が役立っていると、卒業後に手紙をくれた）。

### 3 修学旅行12日前に起きたトラブル

就活スイッチが入りきらない中、4月30日の給食の時間（1限と2限の間の25分間）に、給食室でツチオが小声で、1限目の授業で理科室のドアを開けっ放しにした、発達課題を持つヒカリに対し、気の短いユウトが高圧的な態度だったことを私に伝えてきた。ユウトには、自分と合わない者を排除しようとする傾向があるので、また注意を促さなければいけないか？と思いつつ、職員室に戻った。1年生の時の副担で、ユウトが所属するバドミントン部（以下バド部）の現顧問でもある体育教師に話をしてみた。すると「まあ、ユウトの気持ちも解りますよ。体育の授業の時もヒカリがいつも最後に入って来て、毎回ドアを開けっ放しで

『おい、閉めろよ』と注意しても自分から閉めることができなく、私でもイラっとします。ユウトはバド部なんで、日頃から風の影響を受ける扉には過敏ですよ」と言われた。

それを聴いて、なるほど…ユウトにはユウトの思いがあったんだな。ドアの開閉一つでも感じ方が違うもんだなと思いつつ、翌日の私が担当する国語表現の授業で、この見え方の違いを教材にできないか？と考え、「1人ひとりの見え方の違いを知って、考えよう」シートを作成した。

翌日は、ツチオからの訴えとはせず、トラブルが起きた際、実験室内にいたマキタ教諭から話を聴いたことにし、以下のように話した。

「昨日、マキタ先生から授業直前にドアを巡るトラブルがあったことを聞いた。修学旅行の直前だから、気をつけた方が良くも。感じ方や考え方の違う人間とどう折り合うかを学ぶのが学校に来る意味のひとつだと思っている。自分の言動に反応してくれる他者がいて初めて、自分の思いや行動の意味がわかる。それぞれの背景を知って考える必要があるのではないか」と。

シートを配布し、3列の表に左から①自分の見聞きした事実②それを見聞きしたときの自分の感情③客観的に、読み取ったその時々のも他の感情を時系列に書き出させた。一定時間をおき、その場で、集めて各自にどう見えていたのか私がざっと読み上げながら、書いた本人と全体に確認、整理していった。

「なぜ、こんなことをしようと思ったか」というと、昨日マキタ先生から話を聞いた時は、また、ユウトの自分の好きな人以外は居心地悪くてもいいという悪い面が出たのかと一瞬思ったんだけど、ワカサ先生からバド部で常に体育館のドアには神経を尖らせているって聞いて、なるほど、ユウトにはユウトの見え方があるんだって気づいたからなんだ」この取り組みを通し以下が共有された。

ユウトの「最後に場に入って来た人が閉めるもの」という認識は、先述のバド部ならではのものもあるし、体育の授業中に毎回ヒカリが注意を受けていたことも「何度同じことを言われたらやるんだよ」という気持ちを生じさせる背景になっていたこと。

一方ヒカリの、「必要と思う人間が動けばよい（自分が動きもせず、人に命令する人間や、「言われる前に動け」という言葉に対するアレルギーがある）頼まればやるけど、頼まれなければやらない」という姿勢は、小、中でバカにされたり、いじめられたりした経験がトラウマになっていること、「やられたら、やり返す」

と強く出なければ、自分を保てないのかもしれないこと、また、ヒカリの父親は声が大きく暴力的なため、高圧的な態度や威圧的の行為をととても嫌っていることなどが、ツチオの見方(シート)からも出てきた。

最も驚きだったのは、日頃感情を抑えるため、フードとイヤホンで外界からの刺激を遮断しているショウタが、誰よりも周りを見、それぞれの心の動きを読み取っていたことである。この日コミュニケーションのスキルが高い、ムードメーカーでもある外国ルーツのデイビッドは欠席だった。(補助資料 1)



#### 4 生徒たちの話合いの一部

R「こういうトラブルって、それぞれがどういう性格でどういうクセを持っているかを理解してたら、避けられると思うんだよね。ユウトかヒカリのどっちかが大人になればいいのに、両方がガキっぽい反応しちゃったから起きたんじゃない?」

Y「ヒカリさ、バイトやめた時上司に文句言ったんでしょ」

H「言った。オレは目上だろうがウザい奴には言い返す!」

Y「どういう言い方したの?」

H「お前みたいなウザい奴の下では働く気ないから辞めてやるよ!」って店長を怒鳴りつけた」

Y「店長っていったいヒカリに何をしたわけ?」

H「オレは洗い場担当だったんだけど、どんどん洗い物を持って来るから終わらなくて…『いったい何時までかかるんだよ』とか言ってガッシャーンと大きい音を立てて食器を置いたり、隣に立って流し台をコツコツ叩いたり…」

Y「あー、圧掛けてきたわけね?」

H「そう。めっちゃ圧掛けてくる」

R「社会に出ると、結構上下関係厳しいのよ。上の人の言うことって理不尽なイジメみたいなこともあるけど、その仕事をしていく上で大事なこともあるじゃん。人としては対等でも、上は上で後輩や部下を育てないといけなから、必要なアドバイスなら、聞く耳もって、立てないといけなこともあるんじゃない? 上司に『お前』はないかも」

私「はたらく=端楽」と板書。

Y「それ、どういう意味っすか?」

私「お婆ちゃんがよく、働くときは端、側にいる人のことね、端を楽にするつもりで働けて言ってたんだ」

Y「うおー!なるほどね!(立ち上がり興奮気味)ヒカリ

さあ、ご飯一緒に食べるような友だちっている?」

H「いない。ご飯は家族としか食べてない」

Y「友だちつくと良いよ。大好きな友だちができると、その人のために動くことって苦じゃなくなるんだよ。例えば、ライムはさ、自分の試合がなくてもオレのために電車賃使って応援に来てくれるんだよ。だから、バイトも一緒にやっていると、早く店に入ってやってあげたらライムが楽になるなあ、頼まれたりしなくても、自分からやってあげて喜ばせたいくなるんだよ。そういうのが端楽ってことでしょ?」

私「そうだね。人事の人が『同僚としてこの人と一緒に働きたいと思う人を採用する』って言うけど…」

Y「(遮るように)人から言われてから動くんじゃないよ、自分から気がついて誰かのために動けると楽しいよ。ヒカリもさ、こいつのためなら、何か自分から動いて喜ばせてやりたいと思える友だちつくれよ〜」

H「うーん」

私「ヒカリはさ、1年の作文でも発表したから、みんな知ってるけど、小中でいじめられた、イヤな経験がトラウマになって、乱暴な口調で言われると、身構えてどうしても過敏に反応しちゃうんじゃないかな。言いなりになりたくないって。だから、友だちと一緒に食べる初めての経験が今度の修学旅行なんじゃない?」

Y「そっか……ごめんな。嫌な思いさせちゃって。修学旅行は楽しく行こうな!」

H「うん!」

その授業が終わった後の雑談で、

H「クラスの人たちとこういう風に話し合えたの初めてで……僕、…なんか、涙が出てきちゃいます」(と涙を流す)

R「みんなの考えていることとか、よくわかって、話し合えてよかったな」

T「自分も、誤解のあったことが解ってよかったです」

ユウトからは、夜遅くに「毎度、迷惑掛けてすみません」とLINEが入る。

#### 5 ヒカリの成長が著しかった5年ぶりの修学旅行

5月中旬、2泊3日で京都・大阪に行った。目的地は、3年次の国語表現で、各自希望の土地ならではの食事と学習体験を入れた行程を企画し、プレゼン発表を経て、みんなで決めた。5年ぶりの実施だった。コロナ禍だけが原因ではなく、歴代の担任が、不実施なら積立金が戻ると半ば誘導し、実施規定人数の同意が得られなかったと、中止にしてきたからだ。ここまで不登校等で経験できず、人生初で最後の修学旅行にな

る者もいるので、抑えた費用で豊かな旅になる方法を、添乗員と必死に探った。全員で行きたかったが、弟が生まれたばかりのツチオは、半年前からの申し出通り、旅行代を学費に充てるため不参加となった。

**電車で1人で乗ったことのないヒカリは、事前に練習をしたという。生徒たちは、当日寝過ごすことを恐れ、一睡もせずに集合時刻の10分前に揃い、互いに驚き合っていた。着任してひと月の校長は、事前に渡した各生徒の特徴や背景を全て頭に入れて、接してくれた。**

初日の晩は、広い食事会場でのビュッフェで、「料理を一人で取りに行けないので一緒に行ってほしい」と言っていたヒカリだが、UFJで苦手な絶叫マシンへの誘いを断れたり、午後を一人で楽しめたことで徐々に自信をつけていったようだった。3日目の大阪難波でのたこ焼きタイムでは、魚介が苦手なヒカリを心配していたが、再集合場所に土産を抱えて戻ってきて「添乗員さんに教わった串揚げ屋に一人で行って、カウンター席で食べてきました!」と誇らしげに胸を張った。それを聞いた、デイビッドが「ヒカリスゴいな!この中で一番オトナになったな!」と肩を叩き、ヒカリは満面の笑みを見せた。

風が強い日は母の言いつけ通り学校を欠席していたヒカリ。修学旅行中盤まで、足が痛いと言い続け、バスの席が空けばすぐ座り、大荷物の女性が幼子と脇に立っても席を譲れなかったヒカリだが、それ以降は、トイレを探す私や養護教諭をその前まで案内してくれ、陸上の大会に向け脚力増強のためにエスカレーターを使わないデイビッドを真似るように、階段をぐんぐん歩いて上るようになった。

最後に、解散後の駅のコンコースで、校長に「目の前でぐんと成長する生徒の姿が見られて、感動の修学旅行でしたね」と言われ、見合わせた目が互いに涙目であるのに気づき、2人で笑い泣きになった。

ヒカリの振り返りには「旅行中の自分を褒めたいこと」欄に「1人で食べにいったこと」、感想欄には「旅行は楽しいし新たな経験、成長につながる!旅行というのはとても大事なんだと思わせてくれる!」と書かれていた。

## 6 数学の授業に対する不満が溢れた日

11月6日(水)2限の数学の授業中ユウトが、教室後方のロッカーを開け、中のプリントをビリビリに破り始めたようで、職員室に戻った担当のアラキ先生が「アイツどうしちゃったんだか、おかしくなったみたいで、

何度も取り直させようとしたけど取り直さず、突然立ち上がってロッカー開けてプリント破り始めて…」と言った。

私の中では、すぐに「ああ、ユウトついにコップが溢れちゃったか…でも、目の前の数学のプリントには触らずに、別の、破いても無害なものを破くことで、気持ちを逃がしたんだな。ちゃんと冷静さもあるじゃん」とその思いが手に取るように解る気がして胸が痛んだが、数学の担当者は自分がそのトリガーになっていることには気づいていないようだった。

次の時間がPC室で2時間続きの私の授業だったので、ユウトのそばに行き話しかけてみた。

私「ユウト、大丈夫?何か奇行に走ったらしいけど?」

Y「なんすか?キコウって?」

私「突然ロッカー開けてプリントをビリビリにしたって…」

Y「あー、そんなん数学の時間だけっすよ。オレもうあの時間ムリなんで」

私「何がムリなの?」

Y「あの人の喋り方も、何もかもが大キライになってるんで、生理的にもムリっていうか」

私「生理的にかあ、どういうところが?」

Y「完全に上から目線なんすよ」

私「例えば?どういう感じなの?」

Y「基本的なことは身に付いてる前提で進めるってか、オレらそんなの身に付いてないじゃないすか?前の先生は解りやすかったし、聞けば基本に戻って『こうだからこうだろっ』で説明してくれたし、テストも途中式とかで部分点くれたから何とかやる気になれてたけど…アラキ先生は定時制のことちっともわかってないんですよ」

R「定時制のことっていうか、オレら一人ひとりのことをわかってないっていうか…オレらだって、みんなそれぞれ違うじゃないですか?オレは自分の今の父親がああいう感じの話しかただから慣れてるし、まあ数学も全然わからないわけじゃないから、大丈夫なんだけど、ヒカリなんかは、『休んだらプリントは自分から取りに来て、休んだ分は自分で補習しろ』って言われても、そもそも職員室に行って声を掛けるってところがもう難しいわけじゃないですか?やらせようって気持ちもわからないわけじゃないけど…それだけで、ヒカリはすごく緊張しちゃうし、しんどいんだと思うよ」

Y「そう、一人ひとりをみてほしい、少人数なんだからできるはずだし」

R「体育のスズモト先生とかワカサ先生は一人ひとりをちゃんと理解して、それぞれのレベルで『ここが引き

るように』とかやってくれるし、人として目線が対等だから」…

Y「二人とも良い先生だよな。だからオレら体育好きなんすよ」

R「マキタ先生の場合は、オレら化学苦手だから、全体的にレベル下げてやってくれてる」

Y「マキタ先生も良い先生だな。その先生が好きだから授業も楽しいしやる気になるけど、英語のカワベも教え方は数学に近いけど、目線は対等だし、これさえ覚えれば30点とか単語を予め教えてくれるからまあ何とか、やれるけど…」

R「数学のアラキ先生のトゲを取ったのがカワベ先生って感じ？」

Y「一番かわいそうなのはヒカリだよ。さすがのオレも数学の時のヒカリはかわいそすぎと思う」

私「なんで？」

Y「だって、『そんなのも解んないの』感、口コツに出して圧スゴいし、口調も強いし」

私「え？『そんなのも解らないの』って言うの？」

Y「それは言わないけどお、強い言い方されたら、ヒカリなんか余計イシユクするじゃないっすか？」

私「なんでアラキ先生はそんな感じになっちゃうんだろ？日頃は親切だけどね」

Y「きっと頭いいからじゃないすか？中間考査の後も他の学年より4年はずーっと低くて平均が20点台だとかって、めっちゃ説教したらしいすけど、オレは休んで直接聞いてないけど、そんなこと怒られたってどうしようもないってか…」

私「ここで出たことは何らかの形でアラキ先生に伝えた方がいいんじゃない？」

Y「無駄っすよ、性格なんだから変わりませんよ」

私「確かに性格は変えられないかもしれないけど、アウトプットを変えることは誰でもしようとしたらできるんじゃない？ユウトだっていろいろコントロールして気をつけてアウトプットしている部分もあるじゃない？」

Y「確かに…」

暫く話を聴きながら、この子たちは4年生で間もなく社会に出るし、不当な扱いに対する具体的な声の上げ方を、みんなで学ぶのも良いかもしれないと考え、2人につき間に1台ずつ置かれたモニターに私が検索する「要望書の書き方」を写しながら、「私も、要望書なんて書いたことないから、一緒に調べながら書いてみるっていうのはどうかな？」と声を掛け、「ふむ、まずは相手の日頃のお世話に敬意を払うんだね…どうい言い回しがいいかね？」などと言いながら、生徒たちの反応やつぶやきを拾いつつ、先ほどのユウトか

らの話を言語化していく。「ちょっと、さっき言ったことって、こういう表現で合ってる？ちょっと違う？」と確認する。

私「みんな、もうすぐ社会に出るじゃん。もしかするとパワハラしてくる上司もいるかもしれないし、パワハラだと気づかずに圧を掛けてくる先輩がいるかもしれない。そういう理不尽だと感じた時に一人で闘ったら負けちゃうことが多いよ。たった一人でも闘うという気構えは大事かもしれないけど、同じことを感じているひとは他にもいるはずだから、複数で組織的にやった方が良いよ」と話す内に要望書が一応できあがった(補助資料2)。

HRの代表と言えば、日頃は生徒会長を務めるライムと暗黙の内に決まっていたが、私は敢えて「代表者氏名のところどうする？」と投げ掛けてみた。ユウトがすかさず、「今回はオレ、やりますわ」と名乗りを上げた。面倒くさがり屋のユウトには珍しいことだった。

私「要望書作ったけど、これはケンカを売る果たし状じゃないんだからね、お互いによりよく授業の時間を過ごすためにどうしたら良いかを考え合うための手段なんだからね？」

Y「わかってますよー」

ライムにも、また、「特に不満はない」と答えたツチオやデイビッドにも「ユウトを代表にHRとして要望を出していい？それとも…自分は違うと思ったらもちろん抜けていいんだけど…どうする？」と確認したところ、全員が今回はHRとして要望書を出すことで合意した。「どういう形で渡す？……タイミング見計らって、私から話をした上で、次の授業の前までに渡すというのではどう？」と尋ねると、生徒たちからは同意の声があがり、方向性が決まった。

## 7 翌週月曜に要望書を渡してみた

狭い職員室のすぐ隣に座るアラキ先生に、いつ、どう声を掛けようか逡巡するうちに時間が流れた。全日と兼務の校長が、本当に一人ひとりの生徒、職員のことを見ていると信頼できるので、相談してみた。

生徒たちと作成した要望書を読み、うんうんと頷き、両者のために生徒の思いを伝えるのはいいのではないかと私から伝えましょうかともしも言ってくれたが、流石に管理職から言われたら衝撃が大きいだろうと思い、私から伝えてみますと答えた。

更に、ためらううちに時間が流れ、授業のある翌週(月)になってしまった。生徒の登校時間より数時間前にやっと思い切って別室に誘い、私の授業で要望書

を作成するにいたった経緯や自分の思いを含めて伝えた。その反応からは、あまりキチンと伝わったのか判断しかねたが、「自分なりに考えて生徒たちに話します…でも、最低限授業の説明をちゃんと聴こうとか理解しようとする姿勢はほしいですね」と言った。私は、「先生はパソコンも得意だし、苦手なことはないのかもしれないけど、私なんて専門用語並べられてどんどん説明されたら宇宙人語かって思っちゃうくらいワケわからないです。あの子たちにとってみればフランス語で説明されているのと同じくらいしんどいのではないかと…全く理解できない言語でされている説明を理解しようという姿勢で聴けるかな…」と言ってみた。残念ながらあまり、伝わった手応えが感じられなかった。

たまたま、数学の時間は空き時間だった。職員室の前の廊下から、暗い中庭を挟んだ向こうの定時制の教室が明るくライトアップされたようによく見える。声はもちろん聞こえてこないが、ユウトの様子を見守り、もし立ち上がったなら駆けつけるつもりでいた。ユウトが身振り手振りで何事かを懸命に話す様子や、周りの生徒の顔の上がり具合や、表情から、それなりに噛み合った対話になっているのかなと読み取った。

帰りの SHR で詳しく聞くつもりでいたが、帰りを急いでいるようだったので「数学どうだったの?」とだけ聴くと「ちゃんと一つひとつの質問にこたえてくれましたよ」という答えだった。

## 8 要望書を書いて渡してみたことへの振り返り

翌々週、再び私の授業で「要望書を出してみて」その応答に感じたことや、考えたことを書かせたあと、自由に話し合った。(補助資料 3)

印象的だったことがいくつかあった。まず、気になったのは、「19 歳なんだから、自分の言いたいことは言え、甘えるな」という教科担当者の言葉をもっともだと納得した者が3人いたこと。それが、ユウトからヒカリへの攻撃となってその場で現れたということ(アラキ先生からの話で知った。アラキ先生はユウトの反応に驚いていて、自分の言葉によって引き起こされたことという自覚はない様子だった)。私が4年間大事にしてきたことはどうなっちゃった?とこの時は感じた。(大会での討議で「アラキ先生の枠組みは『自己責任論』でも、生徒たちはそれを4年間で培った渡部先制的枠組みで見えていたのではないか?その後の行動が他者を助けようとするのもであることから、わかる」という指摘を受け、その通りだと気づけた)

ショウタが「先生も一生懸命やっているのに、可哀想」と言ったこと。ライムの「口調のこと(早口、強くなってしまふ)、難しいかもしれないが、人によって解りやすい 説明の仕方があることを理解して、それぞれ分けて、その人に合った説明をするのが(プロとしては)ベストなのでは?」や、ヒカリの「先生も自覚があるんだな、頑張ってる努力していたんだ。自分では気づかなくて、相手から言われて気づいて気を付けようとなるんだよね」も印象に残った。ヒカリは、修学旅行前にみんなから言われたことで気づきがあって、気をつけようとしているんだなと感じた。

文脈は逸れるが、同じシートで投げた「ここが変われば、もっと良くなる〇〇高校」に対し、ユウトが割と真面目に書き、真顔で発言したことも気になった。年齢差別やルッキズムについて話してみたが、あまり時間を取れなかったこともあり、ライムには響いても当のユウトには「実際そうだし、そんなのキレイごと」としか受け止めてもらえなかった。

## 9 その後

要望書の振り返りをした後も、ユウトは日頃の自分のヒカリに対するやや高圧的態度は棚に上げ、アラキ先生の授業中のヒカリに対する接し方に腹を立て、授業を飛び出すことが2度ほどあった。その都度私のところに来て訴え、別室で話を聴くと落ち着いた。2回目だったか、話し終わると「そうだ、渡部先生に言ってちゃだめなんだよな…」とつぶやき、授業に戻っていった。

そしてヒカリに対して放課後の教室で「圧かけられてイヤならイヤだって自分でハッキリ言った方が良いよ。でどうなんだい?ヒカリさあ、アラキ先生にあんな風に言われてつらくないの?これから一緒に話し合いに行こうぜ」とヒカリに話しかけていた。ヒカリはやや当惑気味な表情で「えっ、でも、先生結構変わったし…これ以上はいいよ…」的なことをごによごによ言って尻込みする感じだった。それを見て、まだ納得が行かなかったのか、自分の暴走を止めるためなのか?ユウトが自ら放課後バド部の顧問に立ち会いを頼んで、数学の先生と3人で小部屋で話し合いをしていた。私は、教室の整頓をし、遅れて戻ってきた時にそれを知って驚いた(すぐに帰りがかるユウトが、放課後の時間を使って、ヒカリの件で話し合っていることにも、顧問を立会人に選んだことにも、私を頼らなかったことにも…)。

私はそこには加わらなかった(ユウトから求められていないと感じた)ので、具体的には、何が話された

のかは判らない。職員室からも、声の感じだけはうかがうことができた。最初のうちは若干興奮気味な声が聞こえてきていたが、総じて穏やかで、その内和やかな笑い声まで聞こえるようになった。

ユウトは、だんだんと、自分の気持ちを私を通さずに話すことが面白くなってきているように見えた。それに付き合う、バド部の顧問や、アラキ先生も「アイツは何なんだ?」と言いながらも、職員室に戻ってくる際の表情が少し楽しそうだった。

後でデイビッドやライムなどから聞くと、2回目のユウトは別のことで生じた自分の苛々をぶつけているように感じたから、クラス(学年)として動くのは違うと思ったとのことだった。最後の1ヶ月、数学の授業は、格段に説明が丁寧になったと聞いている。

ごく最近になって、たまたま職員室で残業をした日、バド部の顧問のワカサ先生から、卒業間近にユウトが仕掛けた数回の話し合いの時のことが聴けた。ワカサ先生から見ても、数度の話し合いの場で、ユウトは、数学のアラキ先生に対して、非常に気を遣って、言葉を選んで落ち着いて話していたという。

W:「『先生の気持ちも解るけど、あの時、俺らとしたらこう感じたんだ』とか、順を追って、丁寧に話していて、自分ならああいう風に話されたら感じ入って『そうだったのか、ごめんなあ…』と言っちゃうと思うんですけど、そう感じられる場面でもアラキ先生は、イラッとした様子で、結構強く、上から答えていて、『へー、この人こういう感じなんだ』とちょっとビックリしたんですよ。

話し合いの後でユウトが『ワカサ先生もわかったですよ? ああいう感じって、ちょっとひどくないですか?』と言ってきて、確かにと思ったけどそれも言えず『いや、オマエも少しはガマンしろよ』的なこと言っちゃったんですけど…(少し後悔している口ぶり)』と。

ワカサ先生は その時ユウトの成長を感じたそうで、私も聴けて良かったと思った。

ユウトは大手スポーツ用品メーカーに就職し、シャトルを試打する仕事もしているようで、売り物にはならないそのシャトルを持って、時々後輩の部活を見にきている。デイビッドとライムも翌日が休み(土日は仕事で平日が休み)になる度、しょっちゅう来ている。

卒業後も、特にライムとは時々やりとりしている。現在担任している、1年生は家庭状況の厳しい子が多く、「交通費がないので明日からしばらく登校できない」と言ってきた生徒の家に、車で片道1時間の道のりだったが、退勤後に養護教諭と訪問し、母親の派遣の給料が入るまでガスが止められたままで、シャワーも浴びられないことや、満腹に食事ができていないこと

を知り、その後も何度も家庭訪問することになったのだが、同僚からの否定的な反応(「交通費がなくて通えないなんて致命的じゃないですか? もっと近くの定時に転学した方がいいと思うんですよ。また、ズルズル引っ張って、転学の機会を失うのもよくないから、6月の三者面談辺りには見切った方がいいんじゃないですか」と教務主任に言われたこと)に衝撃を受けた日、「22:00に学校出て、リンカの家より遠くまで家庭訪問して、帰宅したの1時とか…だけど、周りの先生たちの視線、表情は、何となく余計なことしてるみたいな感じを受けちゃう。校長も替わっちゃったし」と、詳細は避けてLINEでライムに愚痴ったら、R「それは大変だね リンカの家より遠いのか…

でも、俺はそこまでできる渡部先生のことすごいと思ってるよ。渡部先生にしか出来ないことだと思う。

あと、周りのことはあんまり気にしないでいいんじゃないかな。極端に距離置かれたり、軽蔑されたりしなければね。

今こうやって生徒とその保護者とコミュニケーション取っていけば、今後円滑に物事が進むようになると思うよ!!

渡部先生は俺らの代を卒業させたんだよ?? また今回は別角度で大変だけど、自信もって今のクラスと向き合って行けばいいんじゃない??

渡部先生がやりたいようにやっていいと思うよ!! 俺も学校でやりたいことやって卒業したし、仕事で今も店でやるイベントとか企画したりしているんで、生徒会のスキルがめっちゃくちゃ生きてます!!」と、まだ社会に出たての卒業生に励まされて、どうにかやれている。



2年 球技大会の後で



4年 文化祭 仮装 de 参加